クレイドル

竜のかんすけ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
クレイドル

【Ｎコード】
Ｎ４６３７Ｚ

【作者名】
竜のかんすけ

【あらすじ】
量子演算器上で動作する仮想ロールプレイングゲーム”クレイドル”　その世界への扉の鍵を、彼は手ににした・・・！

0．序章（前書き）

すみませんノリと勢いで書いただけです本気じゃないので軽くスルーで～

0．序章

昔のこと、荘周は夢で蝶だった。
ひらひらと舞う姿は蝶そのものだった。
だんだんと楽しくなり、気分がのびのびとしていった。
自分が荘周であることはわからなくなっていた。
にわかに目覚めると、自分は荘周であった。
自分は蝶の夢を見ていたのだろうか。あるいは私は蝶の夢なのだろうか。

―胡蝶の夢―荘子

0．序章

佑樹はすっかり凝り固まった背中をぐんと伸ばして欠伸をした。彼のお気に入りのキャスター椅子が軋む。机には数学やら古文やらの参考書が乱雑している。一見熱心に勉強していたように見えるが、科目に規則性が全くない。まじめに勉強していたわけではないようだ。

（あーめんどくせ。夏期講習なんてノリで受けるんじゃなかった）

親指の上をまわり疲れたシャープペンをノートの上にポンと放り投げ、彼は横においてある白いノートPCを開いて弄りだした。今までもこうやって気分転換を言い訳に勉強を避けてきたに違いない。

佑樹が見ているのはオンラインゲームの批評サイト。ズラズラと並ぶゲームに対する批判中傷。意味をなしてない偽装工作済みのランキング。佑樹はとうに飽き飽きしていたが、彼の感覚上における暇さ加減が、ゲームという暇つぶしを探すための暇つぶしを作り出していた。

佑樹はかねてよりゲームが大好きなゲームっ子だ。母親が離婚す

る前に買って貰ったたった一つのＲＰＧを彼は何週もクリアし、それ以降さまざまなゲームに手を出してはハマり続けてきた。ところが大学受験を目の前にすれば、流石に父親はゲームを買うことを許さない。結果、ここ半年の彼のフラストレーションはＰＣでプレイできるオンラインゲームに集中していたわけだが、今の彼の様子を見るかぎりでは、彼のお目に止まるゲームは何一つないようだ。

Ｇｏｏｇｌｅ検索：オンラインゲーム　無料
約　７５，４００，０００　件　（０．１５　秒）

オートコンプリートにとっくに書かれた単語を羅列し、佑樹はゲームを探してゆく。この際、評判がいいゲームでなくてもいい。マイナーな個人サイトの無料ゲームでも構わないと思ったのだろう、ぐいぐい検索を深堀りしてゆき、検索ワードとのマッチが低いページも次々に見てゆく。

オープンワールドオンラインＲＰＧ－クレイドル
今までのゲームの常識を壊します。今なら無料体験実施中！！
ｈｔｔｐ：／／ｗｗｗ．ｃｒａｄｌｅ．５５５．ｊｐ　－　キャッシュ

ページは質素どころじゃない。黒文字とアンダーバー付きに青い文字リンクだけの超手抜きサイトだ。人目で釣りサイトか、どこかの気まぐれ中学生が作っていった個人サイトのように見えた。だが戻るボタンにカーソルが移動するその間に、そこに書かれたゲーム説明に何かが引っかかり、佑樹の指が左クリックを押す躊躇を生んだ。

今の現実がつまらない人、今までのゲームがつまらない人。必見です。貴方にしか体験できない全てをあなたに貴方に与えましょう。

貴方の生きる意味を司るファンタジーＲＰＧです。

読んで損した、と佑樹は軽くため息を付いた。なんのことはない、どんなゲームにもある過大でありふれたキャッチコピー。自分のどこがこんな他愛もない広告に引っかかったのか疑問に持つほどだ。だがページの更新日時は今日だ。こんな手抜きページで紹介してるゲームがどんなものか、彼は批判半分で説明を読み始めた。

数日後――――

佑樹の部屋に届いたのはひとつの箱だった。正直言ってなんで住所と名前をあのサイトに入力してしまったのか、佑樹はいまいちよく分からなかった。例え送料もゲーム機本体も無料だったとしても、胡散臭さをちゃんと疑うべきだった。この箱が届くまでの数日は後悔と、後で高額請求されないか不安になっていたようだが、届いてしまった現物をみて彼は何かしらのあきらめを見たようだった。

箱の中にあったのは、たった一枚の紙と　ＣＲＡＤＬＥ－ＮＯＤＥと書かれたヘッドマウントディスプレイのようなものが梱包材に守られて入っているだけだった。

入っていた紙には、このノードは貸出なのでプレイを辞めたい時は着払いで下記に送るようにということと、まだ当分は無料ベータ版が続くということ。そしてプレイは必ずベッドなどで横になること、周りに物を置いたりして体をぶつけないようにすることなど、少々意味が分からない説明が書かれていた。

コントローラーも何もない。紙にはただ頭にセットして横になれとだけ書かれている。これが新しい新興宗教だろうか、と彼はため息をついた。この後多額の請求が来たりして大変なことになるのは容易に想像できた。

ヘッドマウントディスプレイには継ぎ目がほとんどなく、電池を

入れたりする蓋も全くない。ただ頭に合わせて大きさを調整する紐があるだけ。佑樹は、内側の画面の様子はどんなふうだろう、という軽い気持ちでノードを頭につけた。

1．1チュートリアル1（前書き）

昔ほど集中力長続きしないなぁ～

1．1チュートリアル1

1．チュートリアル

座っていた。
俺は座っていた。ベンチに。
真っ白なベンチだ。さすってみると、つるつるともざらざらとも言いがたい、触ったことがない感触がした。
景色が揺らめいている。見たこともない街だ。だけどよく見たら街じゃない。まるで全てが砂糖でできたものみたいに、真っ白な紙で作った飛び出し絵本のように、全て現実感がない。色はあるが、色あせている。角はあるが、揺らいでいる。
普通に日本だ。見慣れてるし、馴染みもある。けど知らない場所だった。
「こんにちは」
俺は驚いて声がした方に目を向けると、そこにはこの世界に不釣合いな、真っ黒なタキシードを来た老人が道の真中に立っていた。
正直挨拶を返そうか悩んだ。そしてその悩んだ時間が沈黙となって、機会を逃した。
「ここに来るのはもちろん初めてですかな？お名前を聞いても？」
「え、ああはい」
なぜか俺は、俺自身が声を出せることに驚いていた。そしてそのことに焦った。
「俺は坂本、坂本佑樹だ」
「ほぅ～佑樹さんか。ふむふむいい名前だ」
老人はステッキを地面につけながら俺から見て横に向かって歩き出す。
「ところで君は、いくつか疑問を持っているはずだ。そうだろう？」
老人は目線だけ俺向けて話しかけてくる。その目に何かよく分から

ない圧迫感を感じた。その圧迫感が体をゆっくりと染みこんでゆくと共に、俺は今まで全く疑問にも思ってなかったことに疑問を持ち、そして一瞬後には答えが出た。
「ここは・・・夢の中、なのか？」
老人は満足気に笑いながらうなづく。
「そう・・・だけど同時に夢ではない。ここはクレイドルの中だ。とはいっても入り口のチュートリアルルームだがね」
クレイドル・・・どこかで聞いたような言葉だ。
「夢なら俺、もう目を覚ましたいんだが・・・」
「もちろん目を覚ましたいならいつでもここから離れて構わない。だけど佑樹くんは、ここに何かを探しに来たはずじゃないか？」
何かを探しに？そうだった気もする。
「俺は何を探しに来たんだ？」
「それを私が教えても意味が無い。だけど代わりに、ここについて教えてあげよう」
老人は街頭の横にまで移動すると、街頭を手にとって感触を確かめるように表面を滑らせる。
「クレイドル・・・。それは君の夢ではあるが、同時に夢ではない。それは、君の夢をクレイドルが制御しているからだ」
「制御？」
老人はゆっくりとうなづくと、俺の座るベンチの横にある、まるで鏡に写したかのような全く同じ形状のベンチに腰を下ろした。
「君は、現実世界というものが何か理解しているかね？」
「いや、分からない」
「ふむ・・・素直でいいな。現実世界とは即ち、自分の意識との相違の世界なのだよ。考えたとおりにやってみても、現実は予測とは違う反応を返してくれる。だが夢は違う。夢は自分の思い通りになるがゆえに、現実ではないのだ」
「はぁ・・・」
俺にはちょっと難しい。それが思わずも顔に出てしまったようだ

った。
「ちと難しかったかね。まぁクレイドルというのは、夢に非予測性の出来事を与える機械なのだよ。つまりこの街は、クレイドルが君の夢に創りだしたもの、ということだ」
　確かにどう考えてもこの世界は現実じゃない。だから夢というのも納得できる。けど、夢だと認識したにも関わらず実に現実感が強かった。肌の感触、空気のゆらぎ、声の反響。何より意識が現実と相違ないほどにはっきりしている。
「ここは、ほんとうに夢なのか」
「そうだ。現実世界の君は今クレイドルノードを頭につけたまま眠っておるよ」
　それを聞いてはっとした。そうだ。クレイドルという単語。あのゲームの箱。俺はあのヘッドマウントディスプレイをつけて、それから・・・・。
「それから・・・どうしたんだ？」
「クレイドルノードを着けてから、きみはここに来た。ただそれだけだよ」
「じゃあここは・・・。ゲームの中なのか？」
　鼓動が急に早くなる。俺は慌ててベンチを立ち上がり辺りを見回した。だが、何も理解できなかった。
「そうだ。きみはマトリックスという映画を知っているかね？」
「あ、ああ見たとこあるが・・・」
「それとほとんど同じだよ。ここは仮想の世界だ。量子演算サーバーから送られてくる量子データをクレイドルノードを通じて君の前頭葉に投射しているのだ」
量子演算サーバー？投射？意味が分からないことばかりだ。
「だが、同時にここは君の夢でもある。少し歩こうか」
　老人は立ち上がると、俺の前を通りすぎて通りを進んでゆく。こんなところに取り残される訳にはいかない俺は後ろに続いた。
「この街は現実の君のログインＧＰＳ座標から一番親しみやすい街

並みをクレイドル上で再現したものだ。だからもちろん現実にあるものではない。現実感がないと感じるだろうが、それはここが夢であるという証明をするためにわざとこうしているにすぎない。君がこれから行くクレイドルのメインワールドはこんな夢見心地の世界ではないよ」

老人がふっと手を挙げると、赤い何かがふっとこちらに飛んできた。反射的にそれを手でつかむと、それは真っ赤な林檎だった。周りの現実感のない真っ白なものなんかじゃない。正真正銘の赤色で、手触りも重さも感触も間違いなく俺が知ってる林檎だ。

「試しに食べてみるといい。味も林檎だよ。もちろん全て夢だがね」

甘酸っぱいいい匂いがする。俺はゆっくりと一口林檎をかじってみた。頬が落ちるかというくらい甘くておいしい。こんな林檎食べたことがない。

「うまいです。こんなうまい林檎初めてだ」

「もちろんそうだとも、クレイドルノードが君の味覚中枢に信号を叩きつけているのだからね、さて」

老人はくるりとその場で回れ右をして俺に向き直る。

「そろそろ目を覚ますといい。もし君がこの世界に興味があるというのであれば、明日またここに来るといい。まだまだこのゲームは始まったばかりなのだからね」

（ｒｏｏｔ@ＣＲＡＤＬＥ：ｕｓｅｒＩＤ_ｎｒｃ０００１４２ｌｏｇｏｕｔ）

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4637z/

クレイドル

2011年12月15日22時50分発行